

文学教育の基礎論研究(1)

ーテキストの〈他者〉性・〈対話〉性とその〈読み〉ー

上 田 祐 二

Ⅰ．文学教育における読者論的授業成立の一条件

今日の文学教育において、読者論は、テキストの唯一絶対的な意味の追究へと方向づけられた学習者の〈読む〉という活動を解放し、彼らの個々の生産的な〈読み〉を授業の中心に位置づけることの妥当性を理論的に裏づけるものとして注目されている。このような考え方をふまえた授業は、ややもすると受け身になりがちな学習者が教室の〈読み〉の場に能動的に関わっていこうとする意欲を、彼らの活動の結果(〈読み〉)を排除しないことで保証していこうとするものとして構想される。

しかし、ここで問題となるのは、〈読み〉の多様性と恣意性との境界をどこに定めるのかということである。たとえば、読者論が取り沙汰されるときしばしば引用されるイーザーの理論は、読者の創造的な〈読み〉への参加を求めている。しかし、彼の理論を巡って多くの論者が述べているように、イーザーが〈内包された読者〉という概念を用いて描く〈読み〉には、結局のところ、ある読み方をする読者が要求されている。そのため、「読者とはどうやら、テキストを解釈しながらテキストと格闘し、テキストの放埒きわまりない「多様な意味」の可能性を禦しやすい枠組の中へとやっきになって押し込める作業に従事している」^(注1) ことになるのである。これは、これまで〈読み〉の恣意性の基準となっていた作者の意図を、理想の読者の〈読み〉へとずらしただけであり、実のところ読者の〈読み〉の多様性はそれを基準にして切り捨てられてしまうことになる。

だが、おそらく、イーザーの企てにあってさらに厄介なのは、この箇所をはじめどこを見ても、読者の自由が容認されるのはそれが実際上たいして重要性を持たないときのみであるという事実なのだ。…(中略)…しかし、小説のセクションあるいは作品全体の意味ということになると、イーザーは「メッセージ」から逸脱する余地を残さないのだ。不確定な要素は、しばしば末梢的で本質とかかわりのない細部のみにかかわっている。しかしながら、意味の生産される場にあっては、読者は、あらかじめ定められた途をたどるか、テキストを誤解するかのどちらかしかないのだ。^(注2)

もちろん、学習者＝読者の〈読み〉の自由を認めていくということが、そのまますべての〈読み〉を無条件に正当なものとして認めていくということにはならないであろう。しかし文学教育において、読者論的な〈読み〉の授業が可能なもの、有効なものとなっていくためには、恣意性の判断が、作者・理想の読者に頼った、権威づけられた〈読み〉のモデルにとどまらな

いということは確認しておく必要がある。しかしその一方で、学習者の〈読み〉の多様性を問題にすると、それぞれの〈読み〉が位置づけられ得るテキストの具体化のモデルが、授業において示されないならば、それは〈読み〉のアーキーに通じていくことになるであろう。

このように考えるならば、文学教育において読者論的〈読み〉の授業を構想していくとき、多様な〈読み〉が互いに交錯し得るようなテキストの具体化の場面に学習者を向き合わせ、共同の解釈の営みを行わせるかということが課題となるであろう。この課題に対して、前稿^(注3)では、多様な〈読み〉をテキストとの〈対話〉の中に求め、その〈対話〉の場に、学習者に対して〈他者〉として機能するテキストを示していくという解決の方向を述べた。それを踏まえて本稿は、テキストの〈他者〉性、〈対話〉性を明らかにすることを通じて、読者の多様な〈読み〉が生まれる構造を理論的に説明することを目的とする。また、そこで示した理論的枠組みに基づきながら、文学教育における読者論的授業を方向づけてみたい。

II. テキストの〈他者〉性とその〈読み〉

私たちが文学テキストを〈読む〉ということは、読者ではない何者か／何かについての虚構の物語をその世界において体験するということである。つまり、文学テキストを理解することとは、そこに記されていることばを追うにしたがって私たちの前を通り過ぎていく、さまざまな〈他者〉を認識していくことであると言い換えてもよいだろう。このように、読者＝〈自己〉との関わりにおいてテキスト＝〈他者〉がその姿を現すと考えるとき、文学テキストの〈読み〉は、読者とテキストとの相互主観的な関係から生み出されるものとなる。

ところで、〈他者〉としてのテキストを〈読む〉とはどのようなことであるかを考える上で、柄谷行人の言う〈単独性〉と〈特殊性〉の区別は、〈他者〉認識の二面性を浮き彫りにしているという点で、その手がかりとなる。

私はここで「この私」や「この犬」の「この」性 this-ness を単独性 singularity と呼び、それを特殊性 particularity から区別することにする。単独性は、あとでいうように、たんに一つしかないということではない。単独性は、特殊性が一般性からみられた個性性であるのに対して、もはや一般性に所属しようのない個性性である。たとえば、「私がある」(1)と、「この私がある」(2)とは違う。(1)の「私」は一般的な私のひとつ(特殊)であり、したがって、どの私にも妥当するのに対して、(2)の「私」は単独性であり、他の私と取り替えてできない。^(注4)

私たちの〈他者〉認識のありようは、〈他者〉をありのままに認識するというよりは、私たちの生活経験の中でコード化された〈他者〉のタイプ(〈一般性〉)へと組み込んでいくことである。したがって、このような〈他者〉認識は、結果として、テキストをそのコードによって価値づけた、読者自身の認識を照らすものとして考えることができる。言い換えれば、読者はテキストという〈他者〉を価値づけることによって、そのように価値づけた〈自己〉を認識することになるのである。その意味から言えば、〈他者〉としてのテキストを〈読む〉という

ことは、＜自己＞を＜読む＞ということにほかならない。

しかしながら、このような意味で＜他者＞としてのテキストを＜読む＞ことにとどまるのであれば、そのようなテキストは実際には＜他者＞として機能しているとは言えないであろう。というのも、ここでは＜他者＞は、結局のところ、読者という＜自己＞に取り込まれたかたちで現われている＜他者＞にすぎないからである。柄谷の分析からも分かるように、多かれ少なかれ＜特殊＞としての＜他者＞は、その認識において捨象性を伴っている。そこには、＜自己＞とは違う何かを持つ＜他者＞というのが見えてこないのである。つまり、読者が自己の持つコードによって＜他者＞を価値づけていくということは、一方で、＜他者＞としてのテキストを、＜自己＞と＜他者＞とが共有可能、したがって代替可能なく＜特殊性＞として認識することなのであるが、他方、＜他者＞が＜他者＞であることを読者に呼びかけてくる＜単独性＞は、つねにそのコードではとらえきれない外部にあるということなのである。むしろ＜単独性＞を含んでいる限りにおいて、読者にとってテキストは＜他者＞であり得ると言うこともできるであろう。

したがって、＜他者＞としてのテキストと＜読者＞の＜読み＞との間には1つの逆説が生まれることになる。すなわち＜読者＞は、テキストを＜自己＞化することによってでしか、認識することはできないにもかかわらず、そのようなやり方ではテキストを認識することは決してできないということである。そして、読者がそこにとどまっている限り、その＜他者＞像は自己完結したままである。

しかしこのことは、＜他者＞認識の不毛性を示しているのではない。むしろ、ここに＜他者＞との＜対話＞が開かれる契機がある。＜単独性＞は、コード化できない不可解なく＜他者性＞であり、それをとらえようとする限り、飽くことなくコード化し続けていくことが読者に求められるからである。たとえば、立川健二の言う＜誘惑＞も、このような＜対話＞のメタファーである。

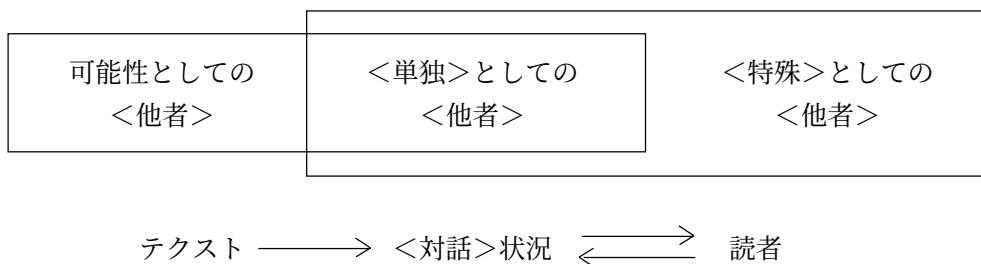
ところが、相手への誘惑をこころみると、すなわち自分のほうへ関心をむけさせ、「わたしを愛せ」と誘いはじめるやいなや、《他者》が姿を現わす。なぜならば、このときのみ、相手は差異をばらまきながら逃げ去っていくからだ。いうなれば、《他者》とは逃げ去る者のことなのだ。とはいえ、このような他者にたいする誘惑は、いわゆる「ロマンチック」な体験ではいささかもなく、むしろ「夫婦げんか」のように日常的であり、かつまた悲惨な体験であるというべきである。にもかかわらず、わたしに見向きもしない他者、まったくの不可解さゆえにわたしを惹きつけてやまない他者、そんな他者との「ささくれ」にみちた関係をどこまでも生きつづけていくこと。誘惑とは、そのような反復の行為にほかならない。(注5)

また、このような＜対話＞として＜他者＞としてのテキストに関わるということは、読者が＜自己＞の変容の契機をも含みこんだしなやかな関係をテキストと結んでいくということである。そして、それが＜対話＞を続けていくための条件となる。というのも、ここで＜他者＞

の＜単独性＞が、それまで読者がとらえていた＜他者＝自己＞像を否定し・解体する（＝「逃げ去る」）よう機能しているからである。このように、＜他者＞としてのテキストを＜読む＞という行為は、これまで読者がとっていた＜他者＞へのまなざしが、当の＜他者＞の＜単独性＞によって揺さぶられるということ、それによって、これまでと異なる見方で＜他者＞をとらえなおし、新しい＜他者＝自己＞像を結んでいくという絶え間ない往復運動として描くことができる。

ところで、これまで＜他者＞としてのテキストという言い方で述べてきたが、それは全体としてのテキストを意味しているのではない。もしそうであるなら、それは、テキストを書いた単独のテキスト外の＜他者＞との＜対話＞を連想させるであろう。そのような生身の作者との現実的なコンテキストにおける＜対話＞といったようなものではなく、むしろ読者は、テキストにおいて体験しているのであり、その物語の内部で出会うさまざまな（＜語り手＞をも含んだ）人物・出来事を＜他者＞として相手に選んで、＜対話＞を行っているのである。したがって、各々の読者に対する＜他者＞は、選択的なものである。逆に言えば、選択されない潜在的な＜他者＞との出会いも、新しい＜読み＞の可能性となる。私たちが、文学テキストを読むたびごとに新しい発見があると感じられるのは、同一の＜他者＞に対して異なる見方をしているということからだけではなく、以前には読者の気に留まらなかった＜他者＞が読者の地平に現われてきたということからも引き起こされるのである。

ここまで述べてきたことをまとめてみると、テキストの＜他者＞性は、読者の＜読み＞において次のように機能していると考えられる。



ここで示そうとしたことは、まず、読者の＜読み＞においては、安易に＜自己＞化することを許さない＜他者＞の不可解さが、その原動力として機能するということである。この機能は、一方で、読み進める中で出会うどの＜他者＞と＜対話＞的關係を結ぶかという選択に関わっている。他方、そのような＜他者＞は、読者にとっての彼の価値を問いかけるということである。その結果、＜他者＞が読者が与えた価値によって切り分けられてしまうならば、その読者にとって＜読み＞は完結することになるが、それに満足しない読者は、それまで＜他者＞に取っていた見方の変容を迫られることになる^(注6)。

次に、＜対話＞的關係にある＜他者＞は、したがって、多様な価値づけを許すということである。

ある。しかし、この多様な価値づけが、ある特定のコンテキストにおいてなされるならば、それらは単に並存するとみなすよりは、共通の〈他者〉に対する価値づけであるという点で、いわば弁証法的な関係を結んでいると考えられる（この点については、IIIで発展させる）。つまり、多様に認識し得る〈他者〉とは何かという問いがそこに生まれるのである。

さらに付け加えたいのは、〈自己〉化された〈他者〉像の恣意性についてである。いうまでもなく、〈他者〉の価値は、彼を取り巻いているコンテキストとの関わりで決定される。したがって、読者が〈他者〉を〈自己〉化するとき、〈他者〉を価値づけるコードが適用されるに足るコンテキストが〈自己〉の内でもともと形作られているという限りにおいて見れば、恣意的^(注7)であるとは言い難い。しかし、イーグルトンが述べているように、そのコンテキストは、読者が無制限に創造していくものではなく、作品世界におけるコンテキストとの関係から制約を受ける性質のものである。

ある単語に通常とは異なる意味を持たせようとしてその単語のために考案できるコンテキストの数となると、文字通り際限がないだろう。しかし、別の観点からみれば、そうした考え方はつまるところ、教室ですごく時間が長すぎた人間の頭の中に芽生えた妄想でしかあるまい。…（中略）…小説の読者は、小説の言語を了解可能なものにかえる出来合いのコンテキストを与えられていない。「ロックは力の限り速く走っていた」という一文で始まる小説は、読者にむかって、『『ロックは力の限り速く走っていた』と語ることが意味をもつようなコンテキストをいっしょに想像してみよう』とそれとなく語りかけているのだ。小説は、ゆっくりと時間をかけてコンテキストを構築する、いや、読者の方が、小説のためにゆっくり時間をかけてコンテキストを構築すると言うべきか。^(注8)

このように読者は、テキストを読み進める中で次々に出会う〈他者〉を、そのつど身勝手に形作ったコンテキストの中に置いて、その〈他者〉を価値づけていくのではない。それら〈他者〉を物語世界という一つのコンテキストに組み込みながら、そのコンテキストの構造化との関わりで価値づけていくのである。

III. テキストの〈対話〉性とその〈読み〉

これまで述べてきたように、文学テキストに許されている〈読み〉の多様性は、1つに、読者＝〈自己〉と〈他者〉との間の〈対話〉的關係から示すことができる。しかしIIの終わりに触れたように、そうした多様性が許されるためには、〈他者〉を価値づけていくためのコンテキストとして機能する、〈他者〉を巡る物語世界の構造化の多様性として示される必要がある。

この問題を明らかにしようとするとき、バフチンの言語観は、有益な示唆を与えてくれる。バフチンは、「記号の形態は何よりもまず、所与の人々が社会的にどう組織されているか、とりわけ人々が相互にどうコミュニケーションを行なっているか、という点に関する直接の諸条件によって、規定される」^(注9)と述べて、記号の社会的側面を強調する。しかしこれは、ことが社会的規範（ラング）という客観的實在にしたがって理解されるということを表しているの

ではない。というのも、「受け容れる以外にはない、抗することのできない破るべからざる規範」^(注10)は、ことばの理解を同一性の理解としてとらえるものだからである。むしろ、バフチンが頭に描いているのは、「常に変わることの可能な、しなやかな記号」^(注11)であり、その理解は、社会的なコンテキストの中で、能動的になされるのである。

記号としての言語形態を構成する要素となるのは、その信号としての自己同一性ではなくして、むしろ特有な可変性なのです。言語形態を理解するという過程を構成するのも、＜同一のもの＞を認知するということではなく、語の本来の意味での理解、つまり所与の脈絡・所与の状況における志向・方向決定です。いいかえると、生成過程の中での志向・方向決定です。^(注12)

バフチンは記号を、それが使用されている動態性に注目しながら、つまり生きた発話の記号性としてとらえている。したがって、記号は意味としての内容、発話のテーマ、そして価値の面から理解されると考える。特に強調されているのは、記号が複数の価値のアクセントによって屈折させられたものととらえる点である。バフチンにとって、この価値というのは社会的なものである。すなわち、「社会的な価値を付与された対象だけが、イデオロギーの世界に移し入れられ、そこで形を与えられ、定着されうる」^(注13)。そして、「方向の違う価値のアクセントが交錯しあう」^(注14)＜対話＞的なテキストをそこに見出だすのである。

このような考え方は、冒頭で触れたような、作者の意図の再現といった＜読み＞を否定し、次のような＜読み＞のあり方を引き出すものと思われる。すなわち、テキストは、作者の意図という固定的なものへの同定によって理解されるのではなく、読者の能動的な＜読む＞という行為をまって初めて意味が与えられる。しかもその意味は、IIで述べてきたような、テキストと読者との間の＜対話＞の関係の中から、読者にとっての価値として付与されるものなのである。

しかしここで注目したいのはむしろ、バフチンの言う価値のアクセントの交錯というのが、テキストにおける内的＜対話＞関係を示してもいるということである。しかも、すでに山元隆春が指摘しているように^(注15)、この内的＜対話＞関係は、イージーの考えるような弁証法的図式へと構成されていく価値の対立ではない。むしろ、そういう求心的な解釈形式から排除されたものを抱え込んだ、種々雑多な声の＜対話＞である。

対話と弁証法。対話のなかで声（声たちの区分）が取除かれ、イントネーション（情動的・個人的）が取除かれ、生きた言葉と科白から抽象的概念や判断がはぎとられ、すべてが抽象的意識のなかへ押しこめられると、そこで弁証法が得られる。^(注16)

その点から言えば、クリステヴァによるバフチン読解は、そうした形式に排除された声が、逆に形式を揺るがしていくダイナミズムを説明している点で興味深い。クリステヴァは、バフチンの言う「他者の言葉を用いて、そこに新しい意味を含ませながら、なおその言葉がすでにもっていた意味を保持しておく」、すなわち「言葉が二つの意味を持ち、その言葉のなかで対立するものが併存する」^(注17)という物語のことばの形式に注目し、それをテキストレベルに敷

衍して、＜相互テキスト性＞という概念を導き出す。この概念は、「どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もうひとつの別なテキストの吸収と変形にほかならない」^(注18)というテキスト観を示すものである。つまり、テキストは、たえず複数の先行するテキストが、新しいコンテキストに引用されてくることによって、変形されながらモザイク状に並存していると見るのである。ここで、先行するテキストの引用と、モザイク状のテキストについては、もう少し説明を加える必要があろう。というのも、この概念は、文字通り過去の誰かの手によるテキスト（典拠）との影響関係という狭いものではなく、テキスト内部の複数性に関わっているからである。すなわち、テキストが抑圧し隠蔽してきた異質なものが、その記号を解体し、新たなテキストの生成へと向かわせるテキスト空間のダイナミズムを表しているのである。

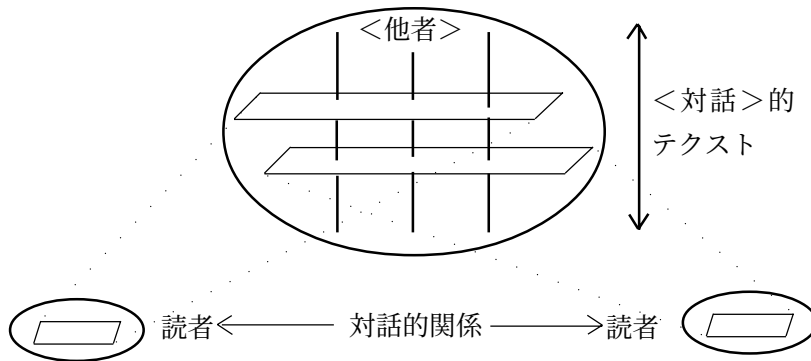
相互テキスト性という用語は、ある（ないしいくつかの）記号体系からもう一つの記号体系への転位を表わす。しかしこの用語が往々にして、あるテキストの「典拠の研究」というありきたりの意味に受け取られてきたことを考えると、われわれはそれに替えて転位＝措定移行という用語を選ぶ。こちらには、ある記号体系から別な記号体系に移行するには、定立の一言表と明示に依拠する措定性の一新しい分節・接合が必要であるということを確認に示すという利点があるのだ。あらゆる意味実践が種々の意味体系の転位の領野（相互－テキスト性）であるということが受け入れられるのであれば、その言表行為の「場」と指示される「対象」は決して、唯一無二でも、中身が詰まっているわけでもなく、自己の本来を備えているのでもない。つねに複数で、炸裂し、面モデルを受け入れるものなのだ。多義性は、記号の多面結合性の、種々の記号体系への従属の結果として現われてくる。^(注19)

もちろん、この概念が、ソシュールのアナグラム研究を土台にしながら、それが孕む問題を乗り越える方向で発展されていく^(注20)ことからも見て分かるように、クリステヴァの提出するテキストモデルは、テキスト産出の過程、すなわち＜書く＞というプロセスを説明しようとしたものである。しかしながら、このようにバフチンの＜読み＞の理論が、クリステヴァの＜書く＞理論へと展開されるとき、宇波彰が述べているように、＜読む＞ことと＜書く＞こととの不可分性を見て取ることができるのである。

つまり私は、テキストを読むという行為をも、一種の引用として理解したいのである。われわれがひとつの詩作品を読むばあい、その作品のすべてをまったく等質のものとして読めるだろうか。気に入った詩句、印象に残る詩句、心につきささるような詩句があつてしばらくでもわれわれの記憶のなかに残るばあいがあるはずである。そのときは、捨てられる部分や、忘れられる部分が存在していて、ここでも引用の操作が何らかのかたちではたらいっていると言える。読むということはその意味でたしかに消費ではあるが、読む者がそこに引用の操作をしているとすれば、それは一種の再生産であって、ここでも、生産と消費はわかちがたく結びついている。^(注21)

これまで考えてきたように、文学テキストを＜読む＞ということは、読者のコンテクストに文学テキストを引用・変容させること、言い換えれば、＜自己＞にとってのテキストを構築・生産する営みであると言える。しかしこの営みは同時に、読者のコンテクストも変容されるということを示している。というのも、文学テキストを引用するということは、そのテキストが読者のテキストに取って替わるということではなく、相互に影響を及ぼし合い、互いに相対化された第三のテキストだからである。これは、スコールズが主張するように、＜求心的読み＞と＜遠心的読み＞との弁証法である^(注22)。つまり、読者に読まれることによって、切り裂かれ、拡散しながら読者のコンテクストに取り込まれていく（＜遠心的読み＞）文学テキストの断片は、その断片相互の結びつきの力が逆に読者のコンテクストをもとのテキスト構造へと引き寄せ、それらを相互に結びつけていく（＜求心的読み＞）のである。

また、IIで述べた＜他者＞の価値づけの多様性は、ここで考察したように、クリステヴァが見るテキストの面状モデルにおいて、それら複数のテキストの交差点として位置づけることができる。つまり、＜他者＞の多様な価値は、新しいテキストの構造化へと位置づけられ得るとき、効力を発揮するのであって、そのような場合に、既成の＜制度＞として確立され固定化されているテキストの＜読み＞に新しい地平を切り開き、それを解体していく。こうして＜対話＞的なテキストがそこに成立するのである。



IV. 文学教育における読者論的授業の構想の視点

これまで述べてきたような枠組みで、文学教育における読者論的授業を構想していきたいと私は考えているが、その場合、次のような方向性が見出だせられると思われる。

①本稿の出発点は、文学の＜読み＞の授業において、作者の主題や教師の＜読み＞の受け売りの＜読み＞を求める授業が、逆にそのような＜正解＞を待つのみで停滞した授業にしまっているという現状であった。読者論的な授業の発想は、＜読む＞という行為を学習者＝読者のものとして、彼らのテキストを構築する行為を授業の中心に位置づけることによって、その活性化を図ろうとするものである。しかしながら、IIで述べたように、学習者＝読者の＜読み＞

はそれ自体、＜他者＞を安易に＜自己＞化することで完結し硬直化した＜読み＞である可能性もある^(注23)。このような場合、学習者＝読者の＜読み＞の変容として文学の＜読み＞の授業を組織していくという方向性が見出だせる。

②学習者＝読者の＜読み＞の変容の契機として働くのは、彼らが＜読み＞を完結し硬直化させる中で切り捨てていった、＜他者＞の不可解さ・割り切れなさに着目させ、それを彼らと関わらせて価値づけていかせるということである。このような点から言えば、学習者からテキストへの疑問を提出させ、そこから授業を開いていくという方法は、有効な手立てになると思われる。

③しかし、それらの疑問や、＜他者＞を読者と関わらせるなかで生み出されたさまざまな＜読み＞は、それがテキストの構造化の局面に生かされる必要がある。多様な＜読み＞は、決め手のない箇所の自由な想像として扱われるのではなく、むしろそうした自由な想像がテキストを＜読む＞ための新しい視点として＜求心的読み＞の場において活用されていくことが求められる。

④また、文学の＜読み＞の授業において、＜求心的読み＞の場としての共同の解釈活動ばかりが強調されている現状を考慮するならば、たとえば、単元学習で行われているように、ある＜読み＞の視点を与えて、＜遠心的＞にテキストを読み替えていたり、読書指導のように、複数の本を横断的に読んでいくということを強調する活動が考えられてよい。このように、文学教育における読者論的授業の成立は、幅広い領域で追究されていく必要がある。

おわりに

本稿では、文学教育において学習者＝読者の多様な＜読み＞の＜対話＞を成立させうる、文学の＜読み＞の基礎理論を検討することに力を注いできた。したがって、IVで素描した読者論的授業の構想は、本稿で仮説した理論的枠組みから引き出せる視点であって、それらを具体的な授業モデルとして提示していく作業を通じて検討されていく課題というべきものである。また、ここで示した＜読み＞のモデルは、テキストの＜対話＞性に注目した空間モデルである。したがって、時間軸に沿った価値づけだけでないさまざまな＜読み＞の局面と関係づけていくという作業も残されている。今後、さらに検討していきたいと考えている。

(注1) T. イーグルトン (1983) 『文学とは何かー現代批評理論への招待ー』

(大橋洋一訳 (1985)), 岩波書店, p.127。

(注2) C. ホルブ (1984) 『「空白」を読むー受容理論の現在』

(鈴木聡訳 (1986)), 勁草書房, p.164。

(注3) 拙稿 (1990) 「文学の授業における読者論的＜読み＞の課題」,

『鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集報 第37集』。

(注4) 柄谷行人 (1989) 『探求Ⅱ』, 講談社, p.10。

(注5) 立川健二 (1991) 『誘惑論』, 新曜社, p.96。

(注6) 丹藤博文は、ここに読者論的<読み>を教室で成立させる意義を見出だしている。

「教師の設定した「幻のいい生徒」に近づける、あるいは「正解」を教え込むといった現状であればこそ、そこにいる生徒が文学に触れることによって、既成のものの見方や考え方を検証したり、自己を相対化するといった認識変容の行為が少なくとも文学の授業において必要になるものとする。」(「教室の中の読者たち—変容行為としての読者論的<読み>—」(『読書科学 Vol.34, No.3』) 1990年, p.99)。

(注7) ここでは、価値づけという<読み>の局面に限って恣意性の問題を考えているが、もちろん<読み>の恣意性は、言語的な意味の読み取りなどのさまざまな局面で検討される必要があるだろう。

(注8) T. イーグルトン 『文学とは何か』, p.136-137。

(注9) M. バフチン (1929) 『言語と文化の記号論—マルクス主義と言語の哲学—』,
(北岡誠司訳 (1980)), 新時代社, p.42。

(注10) M. バフチン 『言語と文化の記号論』, p.107。

(注11) M. バフチン 『言語と文化の記号論』, p.141。

(注12) M. バフチン 『言語と文化の記号論』, p.143-144。ここで、バフチンは、「生成過程にあるものの理解」が、「応答の基礎」であるとし、「理解と答えとの間に、はっきりとした境界線を引くことは不可能です。なぜなら、あらゆる理解が、答えることだからです。つまり、理解したものを、新しい脈絡のうちへ、応答の考えられうる脈絡の中へと移すことだからです」と注釈している (p.176)。

(注13) M. バフチン 『言語と文化の記号論』, p.44-45。

(注14) M. バフチン 『言語と文化の記号論』, p.48。

(注15) 山元隆春 (1989) 「「オツベルと象」における対話構造の検討」(『日本文学』1989年7月号, 日本文学協会) 参照。なお、バフチンと弁証法との関係については、桑野隆 (1987) 『バフチン—<対話>そして<解放の笑い>』, 岩波書店、参照。

(注16) M. バフチン 「1970-71年の覚書」(新谷敬三郎訳 (1988) 『ことば 対話 テキスト』, 新時代社, 所収), p.306。

(注17) J. クリステヴァ (1966) 「言葉、対話、小説」,
(原田邦夫訳 (1983) 『セメイオチケ1』, せりか書房, 所収), p.74。

(注18) J. クリステヴァ 『セメイオチケ1』, p.61。

(注19) J. クリステヴァ (1974) 『詩的言語の革命 (第1部 理論的前提)』
(原田邦夫訳 (1991)), 勁草書房, p.56。

(注20) 「こうしてクリステヴァは、ソシユールが陥った、テキストの内部に在る別のテキストから語を引き出す際の恣意性の問題を、非=主体の生産行為によるシニフィアンが無限

の産出によって切り抜けようとする。」(枝川昌雄(1987)『クリステヴァーテキスト理論と精神分析』, 洋泉社, p.18)

(注21) 宇波 彰(1979,1991)『引用の想像力(新装版)』, 冬樹社, p.42。

(注22) R. スコールズ(1989)『読みのプロトコル』(高井宏子他訳(1991), 岩波書店) 参照。

(注23) このような指摘は、井上一郎によってもなされている。「＜読者としての子ども＞は、作品を読むとき、すでに理解のパラダイムを与えられており、そのようなパラダイムによってしか読まない。したがって、そのパラダイムの解明に向かわなければならないのである。」(「読者としての子ども」(中本環・足立悦男編(1988)『国語科教育論』, 東信堂), p.124。